

諸國
三

物類稱呼

州水

三

W52-5

Ko 85

3



~~22792~~

22708



物類稱呼卷之三

生植

米

こめよぬ ○遠江に天龍の川上よそ。がらりと称をいよまてハ米といふも按に
流よると大峰或ハ羽よふなると流るとの二七日科といふハハと稱て
米とハ呼ぶとハ之ハ和國又ハ朝鮮の方言も穀を菩薩とさうくハぬ

東雅

雜林類事

とて白米と漢菩薩といハ茶と田菩薩といふ也

せりと云又俗同ハ糠味噌といふハ糠と酒と和して制れるを名づけてさ

らんと云是ハ佛經と書寫とハ早書のはは菩薩の二字の呼冠のことと云

廿井と云是ハ事ハこれハさことハがらのるにてそも又名をがらといふ事に

よれと云

秘藏記

云天竺ハ米粒と舍利といハ佛舍利も又米粒に似る故

舍利といふと云云是ハ國河日の淡なる也其の時のなるは廿井菩薩点菩

同播きてのたきびとらふ

紅豆

さくげ○九及上及竹及松取してふらうと云々其取ての十八さげと云々其取
にての十八さきぎとらふ 葉に實取て大角豆の短く生取りのと○こづ

と呼細取てのふらうとらふ

古事紀

美豆羅

又

和名

髪

萬葉

髪

卧註曰童將裝束の肘ハ総角とてあひまはとらふと云々とてとらふと云々さきぎとらふと云々

あきとらふと云々あきとらふの髪に似らうと云々

綠豆

あきとらふ○東園にて。あきとらふと云々又○あきとらふと云々あきとらふと云々
あきとらふと云々あきとらふと云々あきとらふと云々あきとらふと云々あきとらふと云々
あきとらふと云々あきとらふと云々あきとらふと云々あきとらふと云々あきとらふと云々

豌豆

あきとらふ○東園にて。あきとらふと云々あきとらふと云々あきとらふと云々
あきとらふと云々あきとらふと云々あきとらふと云々あきとらふと云々あきとらふと云々

菜菔

だいこん○はごめ大根相州波多野はたの産うりたにて。と云々と云々

菘

京にて。おろし大根と云大坂天満島... 又宮の前の大根と云
河州守口にて是を おろし 大根と云 もの大根ハ小大根 又菜肉也。なるぬき
大えらと云と江戸にて。よりぬきと云

子。○京にて。よりぬきと云 おろし 大根と云 もの大根ハ小大根 又菜肉也。なるぬき

菘 おろし 大根と云 もの大根ハ小大根 又菜肉也。なるぬき

葛西菜又小松川本所牛島田のみき菜に おろし 大根と云 もの大根ハ小大根 又菜肉也。なるぬき

○ おろし 大根と云 もの大根ハ小大根 又菜肉也。なるぬき

おろし おろし 大根と云 もの大根ハ小大根 又菜肉也。なるぬき

おろし おろし 大根と云 もの大根ハ小大根 又菜肉也。なるぬき

おろし おろし 大根と云 もの大根ハ小大根 又菜肉也。なるぬき

おろし おろし 大根と云 もの大根ハ小大根 又菜肉也。なるぬき

冬葱

韭

冬葱 おろし 大根と云 もの大根ハ小大根 又菜肉也。なるぬき

冬葱 おろし 大根と云 もの大根ハ小大根 又菜肉也。なるぬき

冬葱 おろし 大根と云 もの大根ハ小大根 又菜肉也。なるぬき

カマコ 葱ハワチと云々川葱ハ刈と云々又ひとと云々と云々

引及れ根ハ白糸のうらなまひりちれを教のまゝと云

野蒜

のびる○加賀にて○祐之づと云

蒜

ひる○粟東にて○ひると云々粟東と云々なりぬらぬにして○ぬらぬと云

芋

いも○駿河及美濃越後高田所在又常陸と云○なごと云○唐芋と

遠カニ云○女芋と云○蓮芋 武蔵品川と云○ハッがらと云又粟芋と云

不と云○芋莖と云て○いもと云と云東國と云○はらきと云

美濃尾張と云○だつと云美濃尾張にて○からと云と云

らめも菌がらめと云と云やうの國と云と云いもと云てハ助家めたと云

つくぬいも○東國と云つくぬいも又つくぬいも又上のみも又やまと云と云

粟東と云と云○いもと云と云一名と云と云

佛掌薯

と云律輕氏てハ。唐のものと云ふ佐良の類はもとよ申にて。又よきもの

今按にこのいもと呼ぶを。然ともやまのいもハ薯蕷トよよとて東園にもいも

といふ是なり又系物えんやくの山藥トねんトよよハ自然薯蕷トよよを母也南郭遺契 員暄雜

録ヲ引テ山藥本名薯蕷トサナク避唐代宗諱豫改名薯藥トサナク避宋英宗諱曙

遂名山藥ト云又はくぬいもと山のいもといふハ形山のどく又律のどく或石

或人のいもも似る故にかゝあつくるなるべし

黃獨

凡いも○莖肉をて。ハいもとて東園をて。が割うと云 藥種の何首烏にあは

後遠まて。どりふといふお種をて。せんぶとて化景にて。るんハ芋といふ 同名ありて異なる

零餘子

ぬりこ○相州をて。ころめとて常陸をて。いじが子とてふ紀前唐津をて。

いもが子といふ 常陸のまにてのいもが子ハいもが子にてハ助字を平忠盛の

いもが子ハいもほどにこそなるに多しありしもいもが子ハ故事にてに略す

甘藷

つらさつらも○莖肉をて。ハさつらとて東園をて。さつらもといふ紀

おにて。からふもといふ 享保年中薩長より来る味い爽りて。ま性よ

ろ。又長崎に江戸に。いもようせしもと称する物。是は別種にて

蕃薯なり

薺

ふづろ ○おとこらつふをけらふ ○花さくは。どちらふと云はたして。へんくを

尾張にて。ぢぢのまんぢやくだぢまんぢやと云。其之津種。すぢめのたぢこ

といふ。まぢのまぢ形まんぢやの如く。又之線のをちに。ゆづり津種。すぢの仲着

の事とだう。といふ。故にあつた。東國の信。四月八日。母に。はまを。さ。て。行。た。ん

物。ア。て。及。の。油。灯。に。入。る。呪。ひ。を

とこ。ぢ。ら。え。え。 ○加賀及東尾張にて。あ。ま。づ。げ。と。ふ 西尾張にてハ 丹波。巴。ま

てハ。ひん。ぢ。り。と。ま

と。こ。ぢ。ろ。 ○ま。は。國。ま。の。ち。ぢ。ら。ふ。本。野。字。秋。末。にて。秋。を。う。む。ら。と。云。は。信。濃

と。て。か。い。ぢ。ら。ふ。尾。張。ま。の。い。ぢ。ら。ふ。と。ま。は。秋。末。の。う。ら。ぢ。な。ま。と。ま 世。俗

鼠麴草

藜藿

物類集卷之三十二

二月一日いさと別して餅を割一好お録れきとがらぐこしよもぎと蒸ゆにいてよ
のぶ録れきとよままるる系けいとよ事じ実じつ入い 文徳実録ぶんとくじつれきよんとんせせ又また五形ごけい萬まんとあぶぶ
人日七種の具ひとひしちしゆのぐ

火焔菜

蠶豆

さんじじああ子こ ○播はひひままて。ありぢぢいいままいいままて。たたららぢぢららいいよよ
ららららままああ ○東とう國こくままて。そそららままああととららいいああままままて。たたららままああままままて。ああつつままああ
尾お張はりままて。ののららままああ 日名はちん種んそは、伊い豆ぢう録れきののままて。のの月げつままああおお録れきままて。
ふふおおままああ下げ後ごににて。ゆゆままららららままああ伊い豆ぢう及及びままままままて。ががんんままああ申まをままて。ととえ
ぢぢくくままああととまま あつまてハキもあがのまに白て
せねあにけらくとあ

眉兒豆

刀豆

ああつつままああ ○九く段だん友ゆう豆ぢうままて。たたちちんんままああいいよよ
わわんんぢぢんんままああ ○ああままて。おおぢぢんんままああとといいふふぢぢんんままて。ああぢぢんんままああままああままて。いいんん
ぢぢんんままああととままととままままて。いいんんままああととまま伊い豆ぢう白しろままて。せせんんここくくままああととまま

農政全書

眉兒豆、刀豆の類とる

獨活

波疑 免牙子と海をなほすの事世傳しておとすもの死を念ふ
女詞に御の字を冠しりておとすもの死を念ふ

らど○石園ま○ちうよふおまをてい主伴たまに○獨活らひ二三寸地た
まづらむ○うどふてなるたを○ちうと年 阿部氏云松前子

磯野の濱より真の獨活をとおとせんま○ちうと年 赤尾ぶるま○志
ちうと年ぬるまよ

迷蔵

ぜんまい○上宿ま○せんごよふ 種に前胡とよま上宿ま○ぜんま

番椒

たうがう○まを○かうらむと云 大関秀吉公朝鮮を伐ちばふ
時移をみる故にはあま石園及真の仙骨にして○こせうとよふ

東園ま真の胡椒を名

のこせう 出帆ま○こせうとよふ 但る真のうらまもぜんと移る所
とよふ

もつりと移及夫を遠にて○かえんころ熱あま○まづものこなりとよふ

いかにて番近の隠居よかけおと
りふもかうらんらう

首萬

志んぎく○近の美根をて。うらまるとよ。東大坂にて。かすらぎく。またく
らとらふ。東大坂。志んぎくとらふ。

土筆

つくくー○東大坂。つくくーともらふ。畧注 他忍をて。わすーともら
ふ。

「佐保衆の筆をてらつる。雪かきりける。喜のう。ま枝。為家卿

冬瓜

かもうらむ。○東大坂。及申か。少陸道。或ハ上総をて。かもうらむともらふ。東國
よそ。東國をて。とうがくをとり。かんとも。孫て。よび又。ちんぎく

大こと。うらむ。て。く。け。き。それ。う。き。て。孫。伊。丹。を。ハ。古。淵。を。て。う。ち。う。又

旦那を。だん。え。大。坂。を。朝。夷。奈。を。あ。さ。い。ん。ぶ。を。坊。を。だん。東。國。を

牛房を。どん。が。又。ちんぎくを。み。ド。播。磨。を。粟。の。種。を。粟。の。種。又。わん

ら。と。わん。ろ。伊。坊。を。東。大。坂。を。う。ら。む。二。才。ウ。カ。ま。ら。る。た。び。結。ま。が。て

わ。ら。い。ぬ。あ。ら。び

南瓜

ど。う。ら。む。○東。大。坂。に。て。ど。う。ら。む。は。ま。は。ま。は。ま。は。ま。に。て。か。ん。きん

瓜

瓜と総してのうづぐん大坂と。なまきりや又やうづぐんやしてはまのぼり
ふらふらひ。今ハかすがちあま

あまらと○京まで。あまらやまきり一様焼かして。つばかやひきまきり
よ。いふまゝのよ

菜瓜

るやと○京にて。おまらや大坂にて。あまららわまて。とあがひるまて。まる
づけおぼまて。かこらやとらふ 東國にあまらと此と称す。

絲瓜

へちま○信濃にて。こころいと云薩物よて。ながらうと云こころハ糸瓜の
略也。一或人の曰瓜ちまといふ也。こころうらうやまきりあまらとやと
の字はいろはのいひまのちの字のあられハちのるといふまにて瓜ちま
がらうとや。又説にへちまのうハのだんがらうといふまは是ハへちまにハあ
まらちまといふ。の華一鉢はといふ事ハ瓜ちまの女を人そ菜と草と草は
に入らにつけてをりせ。とあり侍の隠遁とらにて菜圃はよはめり。利ハ

甜瓜

まじりて甘味ありて一頃或は白粉固くもの産を尋らるる瓜なりと云う道化
らるる瓜なりと云ふ瓜をいふにこれまじりて文気ある下むむむに吐き死して
しりぬ瓜なりと云ふ瓜をいふにこれまじりて文気ある下むむむに吐き死して
らるる瓜なりと云ふ瓜をいふにこれまじりて文気ある下むむむに吐き死して
け茶をいふにこれまじりて文気ある下むむむに吐き死して
まじりて○瓜をいふにこれまじりて文気ある下むむむに吐き死して
めりて○又瓜をいふにこれまじりて文気ある下むむむに吐き死して
又和菜に之をいふにこれまじりて文気ある下むむむに吐き死して
村の産をいふにこれまじりて文気ある下むむむに吐き死して
たり吐方に用る瓜の瓜葉は瓜の葉よりいふにこれまじりて文気ある下むむむに吐き死して
て切なり

西瓜

まじりて○大坂まじりて文気ある下むむむに吐き死して

錦荔枝

磐梨

桔萋

桔梗

防風

つるれい○もろましのにがらわとよもひ苦丸のつゆにさる

いふふー○京及直心もろのこぼれとよもひ丸もろ○まふいらごとふこまふ

平地木にそへ高き五寸の月宮を結ぶ大まのゆにて赤い外の色もく酒

ハハもも色味ひ酸く甘くあま系末の小思好んでるふも漢名未詳

かき丸○伊勢及紀伊越中を産して○うり種と云然るに○くうりり

とふま佐まのくうりりま根を固くしてこぼれ紀前も○じらも和名二三種と云ま様むづきのめ

くうりりものか
王瓜なり

まきやう○信及上田も○くうりり古今和歌集 物名の寄に

秋ちりり種六なりはくうりり白家ののまらるるもまふの色うりり行

つるりり○菊田及筑前信及も○しめんぞんよふ是和名

按に今世葉とふは物産防風あり江戸の市にあるもの相及孫食らう

そくそとせと葉葉とくして胡蘿蔔に似る相真の防風あり

澤瀉

おもたう○北國まて○あくと云来内まて○さどおもたうと稱も是茶もまて
一種慈姑くさいに似て花も物もおもたうとも同名異物なり

冬 交門

せうぐいげ○夏及及家まて○せうぐいげまて東國まて○さるのひびくま
夏及及○たつのひげと云尾まて○蛇のひげとも

石蒜

あびとむれ○伊勢まて○せもび中國及及まて○あびとむれ又ひげんを又
まら糸のかきまて○よ藤或は夏地まて○いしむいむな又ひげんを越後佐渡に
て○あびとむれまて○かきまて○あびとむれまて○あびとむれまて○あびとむれ
むら尾まて○あびとむれまて○かきまて○あびとむれまて○あびとむれまて○肥唐津
にて○あびとむれまて○あびとむれまて○あびとむれまて○あびとむれまて○あびとむれまて
と云を稱まて

酸模

すいじ○赤肉まて○あびとむれまて○あびとむれまて○あびとむれまて○あびとむれまて
ふよあまて○あびとむれまて○あびとむれまて○あびとむれまて○あびとむれまて

多識

酸模す

酢漿草

さくさく草は是也

かきざく草一名さくさく草

○東の山に生ずる泉の邊に生ずる花は此の如し

○こがねの草は此の如し○また山に生ずる花は此の如し

○また山に生ずる花は此の如し

白前

○また山に生ずる花は此の如し

○また山に生ずる花は此の如し

○また山に生ずる花は此の如し

大蓼

○また山に生ずる花は此の如し

○また山に生ずる花は此の如し

○また山に生ずる花は此の如し

○また山に生ずる花は此の如し

葛根

○また山に生ずる花は此の如し

黄

花鼓子

艸綴摺

翁白頭

大和本州 紫南陸を以て小也根野を以て大也根野を以てこれを合其を相虎
て止む故にちやとてちやとてちやとて

ひるがは○陸東及上野や也越後まで。あめちやとてとて越前にて。

こづつとて相見海まで。へびあがなとて

わびぢやとて一名ねぢとて ○筑前にて。ちんちんれとて 今按に果子の歌

に去程といふ物も因みに似て割がーとてちんちんれとてちんちんれとて

けり故にねぢとてちんちんれとてちんちんれとてちんちんれとて

りてねぢとてちんちんれとてちんちんれとてちんちんれとて

説部 凡そちんちんれとてちんちんれとて 勢陽雜記 勢州吞海院ハ後景の地とて

後景の地とてちんちんれとてちんちんれとて

海とのむまのふる雪のふる土の餅

ちびぢや一名ちやとて ○ちびぢやとてちんちんれとて

善畏の謡に大唐の天狗の首領善畏坊

兔絲

ともまき等に 大坂までいぬれにす。あきれがさるる名をぬきまて。うち
ごころを徳よし。がくまのたきとらうし。まのしに申好たて。けらさく
さし。ふるまて。かづり越中まで。なよどり又。てんぐのりら。仙産を
らん。ちかきそ。ちこ又。かうち。ご落家。神ご。さがる。さう。お給
まて。ものごひ。又。かうげ。ま。ま。尉。の。ま。
祓か。うら。東國。さ。さう。めん。と。と。落。ま。う。の。さ。
ゆ。に。下。妙。の。お。日。さ。上。う。めん。谷。の。水。中。に。い。ま。さ。く。東。
或。は。陽。田。川。の。ま。

三稜

うらご。伊勢。ま。さ。の。ま。さ。う。い。ま。東。或。は。井。改。の。地。力。に
多く。あ。り。の。ま。後。種。の。ま。

玉樓

い。ま。ら。び。う。武。忍。ま。た。ま。さ。ご。う。ま。

石道

ま。ん。祓。ん。う。ら。お。か。ま。て。せん。だ。ん。づ。ら。う。ま。

連銭草

鳥鳳花

籬箕柴

かんざん草 ○江戸まで。かんの草と云。駿河まで。かんの草と云。かた
 ちの。みぢうと云。いな地も付て生る。氣味芹の身。鉄猫児の形。似て
 花。ぼろぼろに。よけて。あづひて。か。い。る。ま。こ。ら。ふ。花。又。蓮。の。香。を。放。に。ぼ。ろ。蓮
 の。名。ま。が。る。べ。し。是。廣大和本州の。花。あり。と。松岡氏曰。唐。の。書。に。半邊蓮
 と。云。る。ま。こ。見。日本。に。て。繪。よ。書。る。唐。草。と。云。物。也。と。云。葉。に。かん。と。い。ふ。ま。は
 古。説。連。銭。草。と。云。似。二。種。を。以。蔓。生。か。ら。物。と。し。て。かん。と。い。ふ。葉。疴。疾。の。と。あ。え
 とも。名。の。あ。り。て。小。見。海。初。の。草。物。よ。い。る。中。を。画。く。今。の。唐。草。の。初。と。云。未。詳
 又。一。種。積。雪。草。と。云。もの。鹿。蹄。草。和。名。あ。ら。ま。ら。し。と。云。又。積。雪。草。又。げん。の
 草。と。い。ふ。と。云。武。江。本。所。三。圍。稻。荷。社。の。側。に。多。く。と。云
 草。ち。く ○学。陸。まで。と。ん。が。ま。ご。と。い。ふ
 七。だ。ん。と。云 ○甲。州。ま。く。の。ち。あ。ら。う。で。ま。ま。と。ら。ふ。花。の。ま。ご。と。い。ふ。う。り。て。四。出。一。房
 に。數。百。花。は。く。ま。ふ。草。絲。を。つ。く。衣。を。付。た。ま。あ。れ。が。し。

○勿負の再平三

鹿蹄草

しららん ○大和の東の山に生ずる。江戶まで。魚つかうさうよ
鹿蹄草 未詳 伊豆の四谷大宮八幡社地より生ずる。同名。子孫傳へ

羊乳

つるあんどん ○江戸まで。つるがうらぶ本ある。中にて。ちうぶと
いらぶとん ○江戸まで。つるがうらぶ

薄荷

ちうり 和名めん ○あまのて。めたる。ひんまのよ ひんまのよ
ちあぢん 和名つなみん ○山城山科まで。びまやくと云。越中まで。
山薄荷なり

沙参

ちやぐまや 和名馬 ○まのて。ちやぐまのよ。筑前まで。ちてん
南部まで。ちやまだらんと云。上遠まで。魚びちやと云。ひ

大戟

のろろ ○山崎伏見まで。ちやぐまのちと云。筑前まで。たさぐま
ちたぐま 一名ちやぐま ○備前まで。みこのまぐま

鴨跖

あなを 和名 ○茨城まで。あなをたれ又つ。ちやぐまのひんま
○ちやぐまのよ。上遠まで。ちやぐまのちと云。筑前まで。ちてん

升麻

とくはげらふよ
とくはあーちんせう
○あまのあはぶと云下野陸奥まで○のりてん

同かまてそあまのりてん
又カガらやん

遠志

とくはあーちんせう
○あまのあはぶと云下野陸奥まで○のりてん

天麻

とくはあーちんせう
○あまのあはぶと云下野陸奥まで○のりてん

龍牙

とくはあーちんせう
○あまのあはぶと云下野陸奥まで○のりてん

兔葵

とくはあーちんせう
○あまのあはぶと云下野陸奥まで○のりてん

景天

とくはあーちんせう
○あまのあはぶと云下野陸奥まで○のりてん

とくはあーちんせう
○あまのあはぶと云下野陸奥まで○のりてん

とくはあーちんせう
○あまのあはぶと云下野陸奥まで○のりてん

獨頭
蘭

糸を以て釣てをて高をにかきて後雷の雨の耐必多を請てまなり
故つものまなりまきまき糸をまきと名はる如又一種鍬葉なる物を元
まきしんも又東國を冬の日む人巨燵と名はるかぬまきしんも
とふ其意ハ巨燵ものつうたふ事又実物そなうど糸考又ハ泣
糸考まきしんも人負りのまきしんも泣糸考まきしんも又実東國を
巻糸考まきしんも余に制と總とて申にまきしんも魚の事と名に
まきしんもまきしんも是ハ彼の糸考まきしんも目考と名はる物に
似たりまきしんもまきしんも如

かくり○糸考まきしんもまきしんも播磨まきしんもまきしんも東國まきしんも
東國まきしんもまきしんもまきしんもまきしんも略系に似てもまきしんも
奴僕まきしんもまきしんもまきしんもまきしんも東國まきしんも
くねまきしんもまきしんもまきしんもまきしんもまきしんも

苦

あさご 一名すりおのき(近江の大津まで)ちぢんきんと云尾張までとちぢの
かごごご 同国に泥亀を 甲斐までからちぢけ伊勢までとごんあごご同す

白子までいけのおもてう駿河までかごごか賀までいもあごご周防までえ

んがしもたよふ 苗かよてえんかうとらふ 把後までかいらも備前までまら

んかしく江戸の河古までかへるあごご又かんと又のせにま 又ちぢんぐもく

又かつたのたすーなまらふとちぢまでかいらあひ常陸までとごんあごす化巻

までとごんあごご然後及越中か賀までかごめそれ いふまてハ泥亀を

今按に苦ハ蓴菜の類夏由全アて其父の花ひくく一種白花なるもの

五膳蓮とらふ京都にひつごんあごご未剋より後をむあに名とら

又浮草ハ摠名と云萍とらひ類とらふ種類を〜葉の裏に水沫をそのハ

類水沫なるハ苦なる又田字州とらふのハ別萍を別種なり苦荬荇

苦 詩周南 參差荇菜 又あさごと海草

浮藷

夫木「おもしろくはらうに深うらぬ浮藷病の心あざむのさそり生くる

たぐい○茨肉まてのさそぎやうのすあぢひらふ東まてハ水あふひとそ

澤桔梗の名 中玉及丸あまてのあぢぢりとりふ大和及尾張まての水あぎこそ倭

水葱と書く花を汲ぎやうとふ反社ひうくまは桔梗のゆ

たぐい○京江戸まてのたぐらう又。たぐらうとそあまてのこーヤア又う

たぐらう又のいすのかさよとそあまてのさつげとそあまてのたぐらび

とらふ 但たぐらうと移る物
二移る物

眼子菜

ひらひらろ○茨肉及少紙まてのひらひらろとそ東まてのひらひらろとそ信

及まてのびりことり奥の津柳まてのびり物とらふ田夫とらそ験の勝まての勝とら

その之 救荒本草 よさうのこそまてに世の菜は似たり

こも 海草にこもとらふきよつてまらるる
當年にちまてをまらるる ○陸奥まてのかつこも

古今 みらりのくれあぢの泥のをれうとあつらん人はあぢらとら

ゆ頁海平

花 藥子

牛 面 記 錦 棗

蘿 摩

牛 面 記 錦 棗 四 三

一 三 三

かきつばら ○ 常 藤 末 いざよひ 花 いざよひ

かきつばら いざよひ 花 いざよひ 末 いざよひ

「あざむき いざよひ 花 いざよひ 末 いざよひ」 信 海

たそむ ○ 賀 次 末 いざよひ 花 いざよひ 末 いざよひ

つらむ ○ 山 城 末 いざよひ 花 いざよひ 末 いざよひ

まのうし いざよひ 花 いざよひ 末 いざよひ

夏 父 の 花 いざよひ 末 いざよひ

ら いざよひ 花 いざよひ 末 いざよひ

と いざよひ 花 いざよひ 末 いざよひ

と いざよひ 花 いざよひ 末 いざよひ

と いざよひ 花 いざよひ 末 いざよひ

と いざよひ 花 いざよひ 末 いざよひ

羊蹄

蘭菊

聚八仙

車削

海金沙

穿を切りたる處にまた似るもの名づけて雀瓢といふ秋の末熟し極て二ツ

これ亦あると綿の如くかるもの出^か是を東武薬店にて和のたぐやと云

し俗名の花 近江及和州にて。ぎしと云出せり。あんだいといふは

○大黃と云 松岡氏曰薬家穿眼と稱する地真の大黃之行と称す

まのあふは別羊蹄なりとも

らんぎく ○あまて。らんぎく云あまて。山なりと云ふ是ハ香薷の

類のあふは藻名未詳

かいむ ○瓶はあまて。やぶでまるといふ

あつむこ ○甲あまて。こもらむきよの房徳之。やづまむと云

あつむこ。かへるむと云ふ

うにくさ ○京まて。かなさ又かつと云近江及美濃或は上野之。た

きざと又いづらむと云あまて。いづらむら又さしせんかづら

本草綱目

卷十一

○ 物類辨別 三

莖

まこと丸 ○ 莖同及近江の咲能登又東海乃御座属て。まこと丸なりんざき
 とまじりて。すま丸と云上野之。まこと丸をれ仙傳きて。かぎをれと云大
 和の奈良小見。治郎坊太郎坊と云和國と。との馬と云 莖一名ま
 ひきまるといふ漢名剪力草花紫白二色をたに莖のりつたに鈎の
 形ありあ花まじり相ひきて小見のまこと丸とて故にまこと丸と名づくこの
 名有又東海をてまこと丸と名と稱する別種は江戸郡多てまこと丸と
 いうもの種なりわらと云漢名不知尾草とて。やつまるといふ是れ真砂の
 足をむかるとまこと丸とも名ふまじりし脚句もマザリがらうと名なりぬ

碎米

らんげ ○ 莖円まのらんげと名ると云ひまのて。まらんげと名るといふ統前まの
 實 撞花と云 今案にいふらんげといふはまらんげなり今らんげを名に
 いふは八柳のまらんげと似て花はまらんげ形は花のどく一物人今古証書して
 まらんげと名るといふ又正月七日七種の菜羹のらち佛の坐と云說非あり又

錢藤

葵麥

壹と云ふ論物入るとに畧と

こふらり○大和及伯耆等して○こふらりふらびとふ

かるる也一名ももぎ○奥及まて○あふまび等と云是本州ニ謂燕麦也

ふそ和奇に海にふるふの川等々ハあふらひかやハ等の惣名日本紀ニ萱姫

想て第の始て生るるの名とと尚矣況と又木州延ハ州本ふ

の文字をーにんむ桔梗山菜蔓の影とてるもの種と相通して

なり丹鉛録ニ青史古礼云男子生而射天地四方其文云東方之弧

以梧梧者東方之州春木也南方之弧以柳柳者南方之州夏

木也中央之弧以棗棗者中央之木也西方之弧以棘棘者西方

之草也秋木也北方之弧以棗棗者北方之州冬木也是又可稱

草也云

をふらりひ○系物江戸とみたのむぎーあぶと云

天南星

物類考

二

橐吾

つハ○江戸にてのつハがらと云大わすのたからと云

續断

と云ふも○江戸にてのさびるこまよりの信及之へがらと云

本州會

續断をさるこまよりのさるもさる

卷柏

いとひを○伊勢にてのいとまると云武及秩父にてのてんぶのいとまると云

和名にいとらこいんげと云今云いとひと云

有通

河のさる一各と云と云○渡河にての赤むと云れと云江戸にての河を

と云と云九月のさるて翌年まで持ゆと云と云

紫羅傘

いらと云○伊豆及渡河にてのしづりま又万年草と云

水仙

と云と云○房がらと云のきんぎと云一各をさる物と金盞銀盞と云

千葉をさる玉瓏たまごと云

藟莫

いぬさび○赤と云のいぬさびあまてのがらと東あまてのひまのさる相

持て。さびるる上野と云のさびる上野と云。さびると云

がまのうら又さびる。さるも云外野は藟莫也

西番連

蕙苴

日向葵

紫金牛

鳳尾生

海仙花

南天燭

こけいさう○長崎まで。がらんびらとらふ 時計草ハ享保年中始て

こける西番連とらげてあるやう

笠翁画傳ニ出

ずくたま○東國まで。ずぶこと云と云。えちこくとらふ

ひうがわがひ丈菊○江戸まで。ひまわりと云大和及加賀まで。ひびるまこと云

からたちぞな○京まで。からたちぞれと云。東お國たに。やぶわじと云

くろひうらぎ○武蔵まで。きらびと云。か賀まで。くらたれとらふ

甲州まで。よめがさ〜と云

さつぎぞな○仙臺まで。けいこのとらふ。常陸まで。さうらぎと云。紀伊まで

○やまがすこと云。後みまで。あつてらじとらふ。類分まで。たいわくのいんま

このまとい民俗海客の柳にさるぬにぬくとらふ

かんでん○と云。そ。らんでんとらふ

南留別志ニ

八種画譜

南天竹と云う

からちをやまららとらふとらふとらふ

物類の冊子

二〇二

玉紫

茶蔴

たまむらさき丸○京まで。むらさき丸をきんぎょとよみ菴蔴にて。こむらさき丸と云
ときんぎょ丸○菴蔴をこいねむらさき丸とよみきんぎょ丸と云。又。むら
さき丸とよみむらさき丸と云。こむらさき丸と云

葉に花ハ白牡丹を似て小なる物なり。花にやんざれと云。秋又むらさき
こいねむらさき丸の父を似て。或ハ醜醜濃或ハ醜醜濃等々の説あり
松岡氏とぶらぐハ濁醜の物なり。と云。 **文選** 濁醜。むらさき丸と
訓も。葉をむらさき丸と云。むらさき丸と云。むらさき丸と云。むらさき丸と云。
いふ松岡氏の説はよぶべきなり

郁子

むべ○葉を南からて。木をむらさき丸と云。或説に是ハ **本州** 子載る木
蓮のころ也。秋よむらさき丸と云。味ハ其ハ小見好んで。食ふ。江州高嶋郡
奥島権兵衛とよむ。毎羊十月朔日 禁中_ニ献_ス 文武天皇の
ころより今に絶たむらさき丸と云。人いふ。葉と稱して。瘰癧と説ふ。能

天
花

合
子
草

堅
香
子

崩せど七平癒と云ふ

さるのあつ○粉州の○かきつばたの○花を後及して○まがもつた

花にい梅花あつして○まがもつた

と云ふと梅ようぎんげの○花を○まがもつた

無花果 本州秋名 ○まがもつた

よしののこ○まがもつた

○まがもつた

かきつばた 今も古も ○まがもつた

うなづき 又まがもつた

へいぎん 松井氏白奥

花もやりに似て○まがもつた

て種を録とすして食ふ 萬葉 及 新撰六帖

○勿負の再手

二

いふ物なりとぞ

乃まふ

いふ物なりとぞ

六帖

いふ物なりとぞ

辛夷

いづー○奥の南部まで○一名木華又
逆巻花と云ふ

花笑靨

いづー○いづー

いづー○いづー

夷曲線

いづー○いづー

いづー○いづー

いづー○いづー

莽艸

いづー○いづー

いづー○いづー

いづー○いづー

毒にあはぶるといふに余考るに毒を誤て命を奪うるは又六月廿四日
糸師の男女愛宕に詣て權を求めて下向する事あり高き糸系
名所あり善根好患の所に

「あはぶるといふ糸系に善根ありて人の死すにのみ」

木槿

むくげ ○東國にて。とらんと云ふ糸系に。むくげと云ふ葉陸及上
綿を総して。トビとらや。のりもさくよ。トビの九段まで。がせんくも云

勇及まで。かまつた。又さだらと云ふ南都にて。いさだらす。と云ふ。これ名

萬葉に。あはぶる。胡白。花。とて。いさだら。いさだら。け。よ。とて。呼ぶ。ま。つ。り。の。れ

と。呼ぶ。一。胡白。の。槿。花。なる。ん。と。和名。鈔。に。書。本。花。あ。は。ぶ。る。と。列。も。古

今物名。あはぶる。と。呼ぶ。い。さ。だ。ら。と。あ。は。ぶ。る。な。る。同。名。異。物。也

まんだらけ ○江戸にて。とらんと云ふ糸系に。とらんと云ふ。糸系。と。呼ぶ。ま。つ。り。の。れ

遠江にて。とらんと云ふ糸系に。とらんと云ふ。糸系。と。呼ぶ。ま。つ。り。の。れ

曼陀羅花

証

蒸て八段のたまげこゝろと物入

夫本

里人やるをふつむらんをいつも人もやまを今うらまをりたまなり

あさた○武忍まで○あさたといひ又むつむむと云上落まで○あさたといひ

あまそ○くらたと云 薪のくらと云 葉にあまそそむつむむと云あまそハ

証まらふー白玉椿まで別種之 後拾遺 式部大輔資業の専に

一君氏ハ白玉椿やちよるも何よかそらんきりかたれた

いよあそ是なり

合歡

福少ののこ○あまそ。福少ののこ中ま及あまそ。あまののこあまそ
かうかえほく道及後まで。かうかのき実あまそ。福少ののこあま

用防まそ。いざうー美他まそ。かうかと云 萬葉 福が又かそを海

うづひまのい○あまそ。うづひまのいあまそ。うまのまをいあま

てのうまをいあまそ。あまのまをいあまそ。あまのまをいあま

吉利子樹

木 蚊 子

五月小蛇じう、四月実熟を赤くして申ぐやう形白く何れを
小兒好して食ふ事ハ侍下のかし秋までにお菓を食ふ事ハたのむ事につ
ふ想之救荒本草一名急麻子和名ウグヒことんこり

ひよこ○名ひよこまて。さうびやうことんこり去依まて。さうぶあまら小尾及びまて
○まひんことん 今按に左の國をいふと田のものとも又俗に
まの木のまひんともなるとまの木の葉の中より出るひよこ尾州の
てこのひよこまてひよこまての種ハ瓢の葉にてひよこまて又後がま
ハ新種の種よりして吹毛ひよこまて又胡椒壺ハ或ハ瓢ひよこ篋ハにむちりゆに
ひよこまてまて

椽 實

じんぐま○信忍まて。ちんぐらうことん又じんぐらうの葉をいふ事ハまて。よめの
じんぐらう伊勢まて。こめのじんぐらう越後まて。ちんぐまてと云上程にて
○よめのじんぐらうことん 今按にまてまてまてまてまてまてまてまてまて今

小梅

八朔梅

寒紅梅

水揚

白楊

接骨木

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 池田炭はげあそりてやく接骨木一倉くらふあにてやくとる他回
 炭と好よし

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
これ梅の玉取

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
浅香山とらふ

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
牙枝にうづ

又庭の箱とたはるともや也

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

楠木

ゆるぎのさ ○尾張及よ移してのさのよと云よ抑及信濃よて。さつ
かどのさと云陸奥及越前相移して。かつれよと云 是ハ晴軍木と云ふよりの
のちりるくーを洗る

勇健物よと云 天台真言宗等の僧徒護る
修行もたにいふと母の故にあつく

楠

たよのさ 和名たりのさ ○山城よて。たつのよと云よ長つよと云よ このさと云よ
まてのつよのよと云伊豫よて。さるあごと云よ佐よて。あがらぬよびとのさといふ
又。あさたのよとも云よ徳よて。さやぶぬといふ伊豆よて。くらだよと云

葉に布よ紫の形 略 肉桂よ似よた肉桂よ、葉に花よいよあつらぬ
かりしあにやふ肉桂とも云

山椒

さんせう ○ 葉もたう味も 辛くたれた物と母のよと云。ひんせうと云

樟

ちゆうさ ○山城よて。あふがーと云よ栴檀よと云よ いんせうと云よ
いんせうといふ朝廷の御祭禮よ用らるる。あふあつ中華よこのよ

檜

書と刻之又らとほくらぬに梓ら名を一名木主

と申のき○東まて。まんのまんと奥南約まて。ちぢらんと○ま

の本のまてと尾張まて。まてんごまて 保きまつ

拘骨

ひらぎ○と寝まて。寝ぎんまて

釣樟

くらもど○越前まて。寝まてと信濃まて。ちぢらまて

今按不釣樟花ハ黄文アリてハ黒一多乳の花ハ花ハむらる俵ま

なる故に信濃まて童謡よつぢらまての寝まてなるといふぢらまてハ

可愛やといふ中ぢらまて 再業よ越前園まてくらもどの事と寝まて名

つら況非也寝まてハ一本まててつらまてハあぢくらもどの條まて又

外の本のまてハまても山人伐てどうたハ枕の寝或ハ新炭俵或ハ垣まて

寝まても縄のわくもゆる物と熱名寝まてとこれハ寝まてもの略寝まて

秋の寝に萩まてのこまてまて寝まても寝まても寝まても寝まても寝まても

勿頁 每平三

勿頁 每平三

李 抽 筭 柴

とよめいふいふと八續あるといふる也山を連赤人がりの海にちる
くれがささちと海も深きも深きと事申して行男浪みあはるは
すといふ○夏化してすむめといふ

ゆ○芽切きて。ゆと云ふまき。ゆぢと云申ふまき。香橙といふ
たけのこ○と総及房ぬまき。たふこ云

ちん○雪及及中ら陸島也。ちんといふ柴也。東國也。ちんた
といふ夏は厚強きていらぬにか賀まき。ちんといふ夏は厚強きていらぬにか賀まき。ちんといふ夏は厚強きていらぬにか賀まき。

○ちんといふ丹波但馬也。ちんといふと云紀取也。ちんといふと云荊棘の伊勢
ちんといふの付るちんといふと云。ちんといふと云。○又木の小枝ある物を

ちんといふて。ちんといふと云伊勢也。ちんといふと云坂東也。ちんといふと云中
臣枝天津金木 文選 以筵撞鐘註小木枝也云○柴内にて。ちんといふ

と云と東國也。ちんといふ能登及加賀陸奥也。ちんといふと云。ちんといふ

楯

とらふ越カキ。とらふあま井郎とらふ

りし。○雲如し。りし。尾張及出さ。口にて。とらふ。ぶと云。伊勢まで。

根ぐと云。安房まで。祐つと云。上下。徳にて。本下。とらふ。依つて。かくい

とらふ。おの。畧り。武苑まで。祐つと云。按に祐つこと。根也。根骨也。

あざら。川中の根本に。よら。ぶ。とらふ。とらふ。根骨も。伐採

の。あ。や。又。よ。ら。ら。ら。横轉。なり。

菌茸

たけき。○か。及。九。忍。まで。な。む。と。ら。ふ。少。又。い。尾。張。まで。こ。ら。け

と。と。下。野。まで。も。と。ら。ふ。依。は。まで。み。と。ら。ふ。○初。茸。と。あ。徳。こ

河。尾。張。まで。あ。と。と。ら。ふ。と。ら。ふ。松。み。と。と。ら。ふ。南。及。及。近。江。と。ら。ふ

○あ。い。と。ら。ふ。と。と。ら。ふ。固。播。まで。あ。い。た。け。と。と。ら。ふ。中。ま。九。忍。と。も。に。松。と。と。ら。ふ。○

紅。茸。と。九。忍。まで。と。と。ら。ふ。と。と。ら。ふ。○檜。茸。と。相。以。塔。の。澤。まで。定。源

○勿。頁。毎。字。二

○一。二。三。

松

まろき まろき まろき ○ 丸内とまきまきして。ららららら

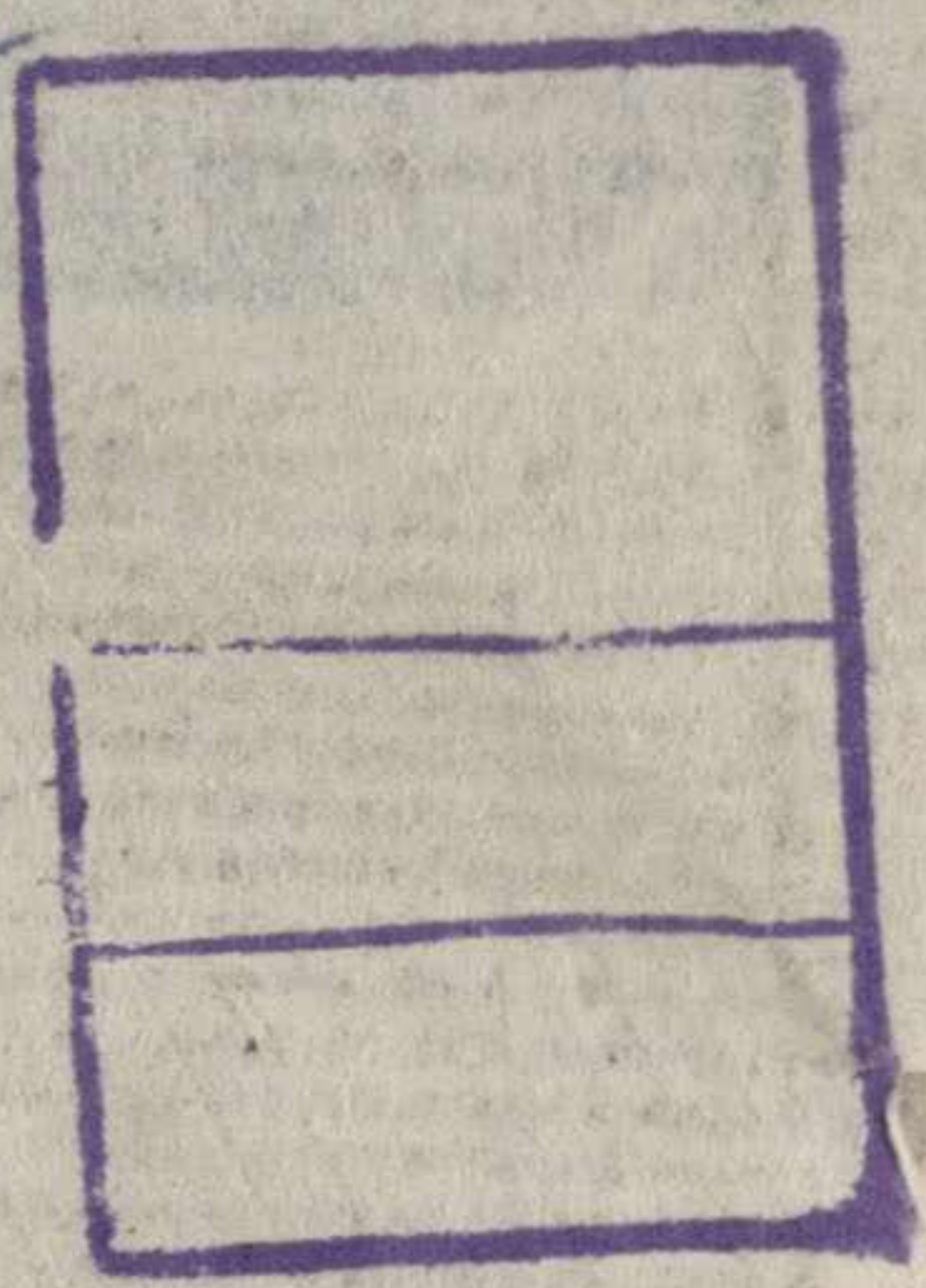
山道のゆびにゆるゆるまのまの松のまろきとまきまきして 貞徳

物類称呼卷之三終

物類科四三

二七

~~22792~~
22708



L

A

U

2

国立国語研究所



1001089877